

研修所トピックス<1>



## 佐渡の中学生と鼓童研修生の 交流公演

文 千田倫子

トピックス<1><2>とも

全国から集まった若者(研修生)達が、佐渡の風土の中で様々な実習・稽古に打ち込み、目標に向かって専心している姿を通して、中学生の皆さんと共感、交流を計りたい。そして普段あまり接することのない太鼓の魅力を感じていただく機会となれば、と七年前から始めた「佐渡の中学生と鼓童研修生の交流公演」。佐渡の中学全三〇校のうち、毎年二、三校ずつ現在まで十五校ほどで交流をさせていただいてきた。

鼓童の舞台メンバーの山口幹文、最近の五年間は齊藤栄一が演出・進行し、研修生二年生と、佐渡の中学生の皆さんとの生き生きとした心を引き出す役を受け持っている。研修所で習ってきた鼓童の舞台演目や、地元の方から習った鬼太鼓、自分達で作った曲などを演奏し、太鼓や研修所の説明、最後に生徒さんに一緒に太鼓を体験していただく、といった内容になっている。当初は、鼓童の活動自体を丁寧に説明していく必要も大きかったが、最近は研修生その人が主役となり、年齢の近い者同士、目標に向かって努力する者同士の文字どおりの交流、刺激し合う場になってきたように思う。それは、一年前いただいた、当時両津市立南中学校長(現在、金井中学校長)の逸見先生のお話から生まれたものだった。

「今の中学生をみてみると、ものごとに見方、面目に取り組んでいる生徒が、格好の悪い生き方のように見られ、ときにからかいの対象にされることがあります。しかし、私は何事にも精一杯取り組むことの尊さを生徒達に伝えたいと思っています。それには輝いて生きている多くの人の生き方に接し、心を揺り動かされる体験をしていくことが大切であると考えています。皆さん方

これまでいただいた感想文から  
平成8年当時佐和田中学校長 岩崎先生

「鼓童の正式メンバーによる舞台も何度か見、感動に胸を打ち震わせているが、この度の交流会のそれは今までのものと異質な気がする。目頭が熱くなり、それが臉に涙となって宿るのを人に見られるのが恥ずかしくて、そっと後方に場所を移した私だった。何だろう、この涙は、躍動感が鼓童の舞台だとすれば(もちろん、それだけではない) 研修生の打つ太鼓の音色はメンバーに及ぶべくもないだろうが、太鼓に向かう心根とか、太鼓を打っている瞬間の境地には、それほどの差はあるまい。近頃よく聞く言葉に『人生は自分探しの旅だ』というのがあるが、真剣に、ひたすらに、そして健気に自分探しの旅を続けている彼らへの共感と羨望が私の涙の答えだろう。だとすれば、将来鼓童に残れる確率の少ないことなどさして問題ではない。ひとり一人にとって、その一瞬一瞬が『自分探しの旅』なのだから。素晴らしい姿を、素晴らしい時間を、ほんとうに有り難う。」

両津市立南中学校3年の生徒さん

「昨日、鼓童の研修生の方達による演奏会がありました。それは見せる側・見る側の壁を越えたものでした。感動するには、予想していたこと・ものを上回る必要がある、とある人が言っていました。まさにそういったシーンに出会いました。その迫力も演奏をしてくださった方達の言葉も、どれもが本物で一生懸命さがあふれていました。クラスの仲間の中でもかっこいい・楽しかった・ノリがよかった、などの感動を言葉にしていました。きっとその言葉の裏に、言葉では表せない何かがあるのでしょう。昨日の演奏もまた、言葉じゃない何かでその勇気をもたらしたような気がする。ある人は、自分の夢に対して頑張ろうと再確認した。ある人は自分の目標を見つけようと思った。正直なところ、僕も勇気をもたらした。いろいろなことに対して、ちょっとだけ迷いがあったけれど、昨日の感動をバネにしてまた頑張れるような気がしてきました。本当にありがとうございました。」

との交流が演奏の素晴らしさと共に、その裏にある練習の厳しさ、一人一人の方が今の生き方を選んだだけと願っています。」

それから、自分の将来・夢を語る練習が始まった。一年半一緒に暮らしてきた仲間が、今まで口にしなかったことを、中学生に向かって話そうとしている驚きと感動に研修生にとって、初めて一公演スタイルで人前に立つ機会である。興味を持ってくれるとは限らない観客の前に自分をさらすことは、何を伝えようとしてここで研修して

いるのかを自分自身に問い直さなければならぬ状況に追い込むことだ。ここで、今までの自分の考え、選択、不安そして希望を語る機会を得て、太鼓だけではまだ伝えきれない思いは言葉で、言葉にならないもどかしさを太鼓や踊りや唄にのせて...この交流公演は、何をしてもどうやってでも、今、目の前にいるあなた達に伝えたいという気持ちを自然に抱かせてもらえる、研修生にとって大切な場となっている。

研修所トピックス<2>

# 心を揺する鬼太鼓



研修所の修了生に会いたければ岩首の祭りに行けばよい！  
 今年は宵宮の為に、盛岡市の黒川さんさ踊り保存会の方々も  
 来島され、いつもの年より懐かしい顔がたくさん集まりました。  
 研修生がふるさと、と感じる柿野浦や岩首の鬼太鼓。今  
 回はお付き合いの古い岩首の皆さんをご紹介します。



岩首鬼太鼓の方々から研修生が鬼太鼓を  
 教わるようになったのは、一九九五年から  
 である。それまでは、前身の鬼太鼓座当時  
 にご縁あって数人の方に教えに来ていただ  
 いたことがあったり、何といても岩首出  
 身のスタッフ、津久美のご実家に呼ばれて  
 皆でご馳走になり、観客としての祭りの楽  
 しさを毎年味わわせてもらっていた。研修  
 所が岩首地区に移ったのを機に、生活の中  
 に息づいている芸能、その地域で大切に伝  
 えられているものを全身で体感したくて、  
 それ以来、毎年の祭りの稽古に参加させて  
 いただいている。

師匠たちは、地元の若者に対するのと何  
 ら変わらず、熱心に鬼を通していろいろな  
 ことを伝えてくれ、踊りを教わるだけだと  
 思っていた私達の心を大きく揺さぶって  
 くれるのだった。今年も祭りの日には、十三  
 晩、親身に教えてくださった気持ちに答え  
 るだけの思いで、ただ必死に鬼を打つ一年  
 生の顔があった。しかし、皆さんの親心で  
 何度も打たせてもらっているうちに、緊張  
 していた気持ちと身体はほどけ始め、いつ  
 のまにか、ここにいないのにいないような  
 全身がしびれるような、喜びに包まれてい  
 る。

あつたかいわくび

文：一九九六年度研修生 座間佳子

「頑張れーおめえが倒れたら祭りには続けれ  
 んようなるんだからな」

祭りの日、面をつけた鬼打ちの息が上  
 り、面の下からこもった荒い息の音がきこ  
 える。肩に担いだ鬼の腕が前にも増してず  
 つしり重く感じる。踊り続け、足がけいれ  
 んさえている。そんな若い鬼打ちを岩首  
 の人たちは熱く強いまなざしで励ましに  
 くる。鬼打ちは主役なのだ。

子供たちは踊り終えた鬼の腕をとり、う  
 ちわで扇ぎ、とにかく鬼のそばに居たがっ  
 た。小さい頃から鬼打ちに憧れている。今  
 年の祭りでも面をつけた若者も小さい頃から  
 そついった子供だったそう。昔の写真を  
 見せてもらうと、見覚えのある五、六歳の  
 男の子が鬼にびつたり寄り添ってうれしそ  
 うにしている。

子供たちは踊れる年齢になるとまずは老  
 僧を踊り、自分をアピールすることから始  
 まる。それが年長者の目に留まれば鬼にな  
 れるといつ訳だ。そつやうて鬼になれた者  
 は「他の者に鬼を打たせたくない。それじ  
 やあ納得できない」という強い強い思いが  
 ある。踊って踊って踊って踊り尽くして、  
 見守ってくれていた者たちにかかえられて  
 踊り終える鬼打ちは名譽ある英雄なのだ。  
 やはり岩首にも島を離れていく若者がい  
 る。だが祭りが近くなると、耳元で「ド  
 ンチンドン、ドコドンチンドン…」と太鼓が  
 鳴る。どんなに離れたところに住んでい  
 うとも太鼓は鳴る。そして祭りの日、みん  
 な岩首へ帰って来る。都会へ行った者が  
 少々かっこつけて古里に戻ってくぬ。そつ



やうて都会へ出て行った者でもまた、若衆  
 として祭りに参加できる。やりたい者が参  
 加する。そしてよそ者の私たちも…。それ  
 が岩首の祭りの魅力だ。そんなあつたかい  
 祭りが、あつたかい岩首の人たちを作りあ  
 げているのかもしれない。

神社でのお籠もり。お酒に酔いつぶれ、  
 獅子の布やハッピを布団がわりにみんなバ  
 タバタと寝てしまふ。それを見て年長者は  
 「これでいいんだ」と言ふ。「寝てしまつて  
 いても、みんなが居れば淋しくないからな  
 」と微笑む。「祭りは楽しくなけりやいな  
 いよ」とお籠もりの一時間おきに打つ太鼓  
 を打ちに行つた。本堂につれしうに三時  
 の太鼓を打ちに行つた。  
 岩首の祭りが好きなのだ。

(一九九六年度研修生調査ノート)

「岩首鬼太鼓の世界」より